

高校英語教育の視点からのグローバル人材育成の考察

宮本知佳・川高航誠・米原隆一・谷川友紀

(授業力高度化コース院生)

1. はじめに

文部科学省は、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるべく、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画」（平成25年12月13日）を公表している。小中高の各段階に応じたグローバル人材の育成が求められる一方で、新学習指導要領の「地域に開かれた教育課程」という言葉が示すように地域の特色を生かす教育も求められている。

これらの背景から英語教育においても、両者を統合していく可能性があるのではないだろうか。そのためには、目指す子ども像を Global と Local という二つの視点から問いなおさねばならない。本研究では、SGH（スーパーグローバルハイスクール）全国高校生フォーラムでのポスターセッション分析、様々な学校での授業研究、文献研究などを通して、英語教育で目指す子ども像を Global と Local という二つの視点から考察していく。

2. 研究の概要

狭義の意味でのグローバル人材とは、文部科学省が提示しているように社会のグローバル化を踏まえ、将来、国際的に活躍できる人材を指すと考えられる。しかし、広義の意味でのグローバル人材とはある一つの決まった型があるのではなく、各学校あるいは各個人によって捉え方が異なる。それぞれが自分たちの考える子ども像を目指すことが重要ではないか。ここでは2つの事例を通して、考察を深めていく。

まず、2017年11月25日に行われた「スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム」のポスターセッションに参加した116校より、発表内容が学区内にある地域の特性を生かしているかという観点に絞り、パンフレットの検討を行った。116校（ポスター掲示のみの学校を除く）の中で、実際に地域特性を取り入れた内容で、グローバル人材育成に取り組んでいる発表を行っていたのは21校であった。共通点としては、学区内に地域特有のもの、地域の課題としているものがあつた。また、21校を除く他の学校でも、ローカルの視点を日本、国として捉えた内容もあつた。

ローカル人材の育成という観点からみると、地域の独自性を把握して地域の問題をとらえ、地域の課題に向き合い、地域に貢献しようとしている子どもが英語教育を通じて育成されている。SGH フォーラムでの発表としては英語力が備わっているという前提であつたため、発表できる英語力の育成という点での示唆は得られなかった。地域の特性を発表するにあたり、必要

最低限の英語力はどのように保障されるべきだろうか。

さらに、新たな問いが出てきた。すべての高校が英語教育を通して、自分で思考し、独自の考えを持ち、自信を持って他者に伝えることができる人物の育成を目指すとするならば、SGHに指定されていない高校でも行えることとはどのようなことなのだろうか。そこで着目したのが、京都府立園部高等学校の取り組みである。京都府立園部高等学校では、「英語科におけるパフォーマンス評価の取り組み」と「課題学習プロジェクト」を推進している。同校が研究を進めるにあたり、英語の学習に困難を抱えている生徒が意識されており、高校卒業時にどの生徒にも一定の学力を保障するカリキュラムと授業開発が目指されている。例えば、中高で一貫した到達目標が設定され共有されている。また、全学年でBBCの新聞を用いた授業や、体験学習を通じて生徒の興味関心のあるところから世界とのつながりを発見する取り組みである。

3. おわりに

以上のことから、私たちの研究グループでは、研究の成果を生かして、次のように目指すべき子ども像を想定した。

子どもたちは自分自身を他ならない自分であることと認識すると同時に、他者を認めることができる力を前提として兼ね備えている。私たちの考える子ども像とは次の3つの要素から成り立つ。1つ目は、一人ひとりが個々に合った世界とのつながりを発見することである。2つ目は、そのことを踏まえて自分の考えを発信することである。3つ目は、個性を生かして社会に貢献することである。しかし、単に英語が話せるということだけでなく、自分自身の考えを持って、堂々と自分の意志で行動できるように促す必要がある。これらの要素を育成するためには、国際共通語である英語運用能力が必要である。

現状の高等学校での英語教育では、まず自分の伝えたいという気持ちを育成し、その内容を英語で伝えるという機会を多く与えることが望まれている。しかし、その機会を与えるだけでは私たちの考える子ども像は育成できないだろう。それぞれの生徒が、自分なりに世界とのつながりを発見できる力を身につけ、何をしたいかという志を持ち、主体的に学ぼうとする姿勢を英語の授業だけでなく、他教科とも連携して育成していくことが重要である。教科の他にも、自分の将来を決定していくキャリア教育の場面でも必要とされるのではないだろうか。

4. 主要参考文献

- ・西岡加名恵・永井正人・前野正博・田中容子（2017）『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる―学ぶ力を育てる新たな授業とカリキュラム』学事出版。
- ・河合江理子（2013）『自分の小さな「鳥カゴ」から飛び立ちなさい 京大キャリア教室で教えるこれからの働き方』ダイヤモンド社。

謝辞：本研究は、京都教育大学大学院連合教職実践研究科の同窓会である紫漣会の支援を受けて行われました。この場を借りて、お礼申し上げます。